

眞 生

第八卷 第三號

- 「一日働かざれば一日食はず」と云つて終日食を斷つた支那の百丈と「働かざるものは食ふ可からず」と云ふ近代の社會主義者と、深く考ゆれば何となく相通するものがあるではないか。
- 前者は之を自らに求め、後者は之を他人に求める。そこに主觀的に見るのとき客觀的に見るのとの相違はあるが、其の云ふ所は即ち一である。
- 世の中の凡てが終日働いてさへ食えないのに自分一人一生働かないで食ふてよいだらうか。況んやその上に働いた人の頭をはれて獨り豪遊をかまえるに於てをやである。
- 尤も働くことには必ずしも筋肉労働に限つたものではない。そこには各人の天分もあり、時には其の人の事業に對する立場もある。乍然それがいかなる場合にもお互に働きて得る身であるならば各人が其の分に應じて働くこと云ふことは決してまちがつたことではあるまい。
- しかも、それが病氣の爲めに働けぬとか、老人の故に働けぬとか、或は若少の爲めに働けぬと云ふことをその中から除外してのことであることは云ふまでもない。
- 乍然世にはともすれば此の他に他人のいかんを顧みず、自ら働かずして獨り樂しまうとする人々がある。否、今日の多くの場合、世間の多くは悉くがそれではないか。否、それどころかともすれば自分では避んでゐて、その上に他人の分までも獨占しやうとする輩さへある。
- 乍然かうした時に、かうした人に、それをどうするのが、一体國家の使命であらうか、若しも國家が國民の本當の意志を代表する者ならば働かんで食ふ。之等の人々に何と制裁をするだらう。「働かぬものは食ふ可からず」だけではあるまい。
- 百丈禪師の場合、それは個人の修養として、之を自分のものとして用ふるに何の障りもない。乍然それが社會的に働かない人々に對しては何とすべきであらうか。「働かざる者は食ふ可からず」と、此の言必しも悪い言ではない（念）

此二つを得よ

目次

此二つを得よ 魁子

眞生の道 土屋親道

神窓雜感 土屋親道

禪勝房 中村神羽

念佛三昧會感想詠歌

早川禮山

遇感一二 神谷善之進

吾朋使り

私達は救はれてゐるも、救はれてゐぬもない、皆現に生かされてゐるのです。其いも悪いも、悲しいも、喜ばしいも、皆如來の御いのちによつて「いのち」の儘にながらへまゝとて貰つてゐるのです。それでこそ、悪しきも、善しき處に居らず、不幸も不幸の處に停らず、漸々に進化し、向上して永遠に増長の途を辿るのです。

吾々五十年の一生位いは、此の悠久な進化の全体に較らべたら、ほん一部分で一睡の夢に過ぎません。而し此の短い間も此の大きいフィルムの連がりであることと思ふとき、一刹那も本當に尊い氣がします。そして價値の上にもメカリのないやうに、本當に強く正しく生きたいと思ひます

□
ほの暗き裏街筋を淋しくも、ハーマニカふく陰の消えゆく
大空を仰ぎながらにニツミ笑み、生き往く末を思ひめぐらす
が、こんな處にまだ一つこぼれてゐた種子を拾ひつ
うら／＼と春陽をあびて庭の面に、芽ぐめる草ながめてそ立つ
み佛のいのちを享けて生くる身に障りのさふるこゝあらめやも
信ずさばかくそあらぬ何一つ、正しき思ひさばらぬはなし
み佛を、み佛をこて心根に、掌を合はせつ、貰いてゆく
父も在まらず、母も在まらず、されど我れに在ます、み佛ひさり
天地と共に亡ふもひたすらに、滅びぬいのち生き活きて往く

□ 本當に宗教を信じてゐる人が少い。

□ 極樂へ行くのだ、地獄へ墮ちぬのだ、あの佛様、この觀音様、あの聖天様、このお稻荷様、此の宗派、あの教へまじり／＼に決め込んでゐる。そして念佛がい、の、題目が勝れてゐるの、キリスト教の祈りに限るの、我々には祈りがないの、甲論乙駁、様々に通を利かして獨りよがりをしてゐる。それ等は皆自分に都合のいいやうに佛や、神や、教へを造り換へて信じてゐるのである。實は其の教へを信じてゐるのでもなく、自分の我儘を解釋するのに便利上神や佛を用つてゐるだけであつて、佛に頭を下けてゐるのではなく佛に頭を下げさせてゐるのである。

□ 宗教はそんな「信する」ことではない。
□ 宗教は生活することです、生活することは働くことです、働くことは儲けることです、儲ける事は、目に見える金と、目に見えぬ徳とを儲ける事です。目に見える金を儲ける事には速いが、目に見えぬ徳を儲ける事には鈍くある。金を儲ける事は容易だが徳を儲ける事は困難だ、而し見やうによつては金を稼ぐより徳を稼ぎ出す方が樂かも知れませぬ。兎に角此の二つを儲け出す事が本當で、此の二つを儲け出した人が妙い。

□ 金をよう儲けぬのは第一に先きが見えぬからです。第二に本當に元氣に愉快に働いて居らぬからである。先きが見えぬのは、餘り慾が深く早く儲けやう、早く儲けやうとあせるものだから、つい眼が眩んで先きが霞み、手元が狂つて却て損をすることが多いのです。元氣に働けぬのは、人にやらせやう、自分は樂せやう、樂して良く思はれよう、彼此はそんなにゴッ／＼やらぬが儲け出した、腕コキだ、頭がイ、まほめられやうとしてゐるからだ。困難な仕事も奪ひ取つて自分がやりませう、皆自分の修練になる経験になります。誰れの爲めになるより第一に自分の爲めになつてゐるのです。

□ 金を持つてゐる者ほど無節制な者はない。金を儲けた者ほど剛腹で強慢な者はない、斯うした一面が多いのは徳の修養を缺いてゐるからです、金を得た丈では人生半分の成功です「汝等財寶を天に積め」セイエスも教へてゐる、金を儲けた位いで天下を取つたやうな氣になつてゐるのは、それ自身人間が小さいことを表明してゐる。信を得なければ駄目、信を得なければ。
□ 信とは正しく、強く、生かされる事であり、精一杯元氣で働く力を出さして貰ふことでもあります。(魁子)



眞生の道

土屋 觀道

□愚にもつかない事柄の爲めに自分の爲すべきことさへも出来ないのは大いに反省すべきことだと思ふ。若も私達の生活に此の反省がないならば人生の多くはたゞ徒に終るであらう。

□私の経験によれば餘程の自覺と其の決心がない限り、多くの人生は眞實の生活を忘れて、ともすれば所謂世俗の生活に墮し易い。殊に自らには餘程に深い反省の人にして、それが多くの人々に接するとき、反つて第二義に墮する嫌いがある。

□例へば自分一人なら、滅多に食べぬ間食でも、人から出されては折角のことだからとて之を食べ滅多に行かぬ芝居にでもおつき合なら行かうとする。乍然かうした生活が果して私共の眞剣な生活であらうか。

□たまたま、遠方から訪ねて来てくれたその人をねぎらう爲めに、御馳走をなし、久々に會つた事だからとて芝居でもおごると云ふことは普通の人情としては最も尊いことである。乍然靜に人生の一生を考ふるとき、それが究竟の生活であらうか。

□遠來の友なるが故に、久々の會合の爲めに、御馳走をするのも芝居を見るのも、それも決して惡

いことではないけれど、私の今日では更にそれよりも、日を繼ぎ夜を轍してでも、共に世を語り、道を求むるこそ、更にそれにも増したる人生の大道ではないかと思ふ。

□私は此の意味に於て、近頃の人々は大いに反背すべきものがあるかと思ふ。之を偉人の生活に比ぶれば果して幾何の遠いであらう。私は常に此のことを思ふて止まぬものがある。

二

□私は近頃、自分の云ふべきことも云へず、自分の爲すべきことをも爲せず、あまりに人の言ふまゝになり過ぎた感じがする。乍然それはあまりに私が、自分の言いたいこと、爲したいことを人にも望むからではないか。乍然それはあまりに勝手なことである。

□而も、その爲めに、私は自分の云ふべきことをも云へず、自分の爲すべきことも爲せず、正に一生をこのままに終らうとする世に之ほど愚かなることがあらうか。

□たゞい、人からよく云はれ、悪しく云はれても、それが人生の究竟の上に、一体何のかゝわりがあらうに、ともすれば私共は反つてその爲めに一生を棒にふるうとする。

□乍然それが果して人生であらうか、否、私共は反つてその爲めに人生の一生を自ら誤り、又延いては人の一生を徒に終らしむる事となる。従つて、私達の一生はよほど考究すべきものではないか。

□之からの私達は主として第一義の生活でありたい。そしてまた、多くの場合、世間の人々に接するにも、自他共に眞に生きるの道でありたい。たゞい、よしそれがはたからは如何に見えやうとも、それが眞實の道でありたい。

□而て、それはたゞ、常に如來を中心とする眞人の生活でありたい。全体が一として、共に生きるの道でありたい。彼と我と二つが別々の生活にあらずして、一以つて貫く眞人の生活でありたい。自

と他とが別でない、一切が一となり、一が一切となつて、すべての上に光ある生活である。

□かくて、私共の人生は自己そのもの、願いが其のまゝ一切人類の願いであり、言換れば自分の願いと人の願いとが一如でありたい。自利がそのまゝ利他であり、利他がそのまゝ自利である。即ち自他の區別を絶したる公私一如の生活である。

三

□乍然凡そ世の中に之ほごたやすくして、亦之ほご困難なものはないかも知れぬ。それは前者に於て信仰に徹せるものがそれであり、後者に於て信仰に徹せぬものがそれである。

□信仰に徹せるものは一切が如來を中心となし、信仰に徹せないものは單なる自己を中心となす。そこに前者は公私が一如となり、後者は公私が各別となる。公私一如なるが故に自他が不二となり、公私各別なるが故に自他が別々となる。

□前者は自他が不二なるが故に全体が一となり、如來が中心となつて、各々の立場に動くが故に一切が統一し、後者は自他が別々なるが故に、全体が一とならず、如來が判らずして、統一がない。

□公私一如と云ふことは必ずしも自己を捨て、他の爲めに盡すことではなく、又他を捨て、自の爲めに盡すことでもない。そこには自が他となり、他が自となり、自他共に生きるの眞生の大道である。

□従つて、自他一体の生活は恰も人間五体相互の生活の如く、又身心一如の生活である。言換れば一切をお互に相扶けに助けて、共に一体の働きを爲すものであつて、決して一が一にして立ち行くものでない。そこには常に一が他の爲めになり、他が一の爲めになるの生活である。

□之に反して、自他各別の生活は所謂利害相反するの生活である。従つて、自己の爲めに計ることは他の爲めにならず、他の爲めに計ることは自の爲めにならぬと考ふるの生活である。乍然自他が一なる限り世に果してかゝる矛盾の生活があらうか。

□乍然そこが信仰の人と、不信仰の人との境である。何となれば信仰の人には一切が公私一如の生活となり、不信仰の人には一切が公私不一如の生活に見ゆるからである。乍然凡そ宇宙の眞相は本來が公私一如のものであり、自他が一体のものである。

□だから、靜に人生の一生を考究すれば凡そ世の中のこととして、公私が一如であり、自他が一体でないものはない。従つて、自の爲めになるものは他の爲めにもなり、他の爲めになるものは自の爲めにもなる。又自の爲めにならぬものならば決してそれはまた他の爲めにもなるべきものでない。

四

□だから、眞に自らに生ける人々はやがてまた、眞にすべてをも生かす人々である。而もそれは自らに生けることがやがてまた他に生けることであり、他を生かすことがやがてまた自らに生けることであるからである。

□だから、凡俗の人々には眞人の生活が判らない。たまたま判つたと思つても、それは自を殺すものだと思つてゐる。けれどもそれは決して自を殺すものではない。否、それが即ち眞人の自らに生くる唯一の道である。

□乍然凡そ凡俗の生活には之ほご困難なことはない。そしてまた、之ほご判らないことはあるまい。「古來豫言者は古郷に入れない」と云はれてゐるが、それは必ずしも古郷ばかりでない。多くの凡俗の世界には永久に眞人の入れらるべき天地はないかも知れぬ。

□それにしても、十字架にかゝつたキリストが思いやられる。又孔子や釋尊の生活がなつかしい。私共は之からたゞ一人となるかも知れない。乍然それにしても、それが道ならばさうして一人で行かうではないか。それはいつまでもくだらぬ生活をつゞけて行くよりも、それが眞生の道であるからである。

□私共は一切が人生の第一義でありたい。而もそれがよし多くの人に入れられやうと、入れられまいと、それは私共のあえて關する所ではない。私共は自ら眞に生くればよい。而もそれはまた他も生かす眞の道であるからである。

□世の多くの人々よ、私は衷心から諸君を敬愛する。乍然その敬愛はごまでも眞人の敬愛でありたい。單なる肉慾の友にあらずして、永劫に變らない眞生の友である。眞人の生活として、諸君と共に、私は神の如き生活、佛の如き生活が望みたい。

□否、更に率直に云ふならば私は諸君と共に神の生活、佛の生活がしたいのだ。それが佛教の本心である。そしてまたそれが私共の本願である。そこには公私が一如となり、自他が不二となつて、如來を中心とする全一の世界がある。

□道友と共に山に行くのもよい、又時には川に遊ぶのも苦しくない。加之、時には御馳走も食ふべしである。芝居も觀るべしである。乍然、それにしても、それが徒なる單なる遊びであつてはならない。そこには限りなき道友のまたなき喜びがあるべきである。

□従て、之からの人生はすべてが眞實の生活でありたい。善と思ふことも、惡と思ふことも、それらは一切が全人類を中心として割出された生活でありたい。全体が一つとなつて、常に一緒に向上するの生活でありたい。

□而て、諸君と共に此の人生の第一義から一切の生活を開きたい。即ち、一切を如來の光りに照して、直に眞人の生活に立ちたい。つまらぬ人誼や人情の一切を放擲して、そこに眞劍な自己でありたい。それが即ち眞生の道である。

(三、一〇、二〇—三、二、一四再校—四、二、一、三校)

病窓雜感

土屋觀道

○こゝに病窓雜感と云ふ、之は私が病氣して感じたことではない。昨冬以來の長女の病窓に於て、私の感じた隨感である。

○こんなことは少しく經驗のある人は皆御承知のこと、思ふが同じ一つの事からでも、それが人のこと、自分の事では可なりに大きな相違である。他人の子供の病氣なら、まあさうか、それは氣の毒なごま位で濟むことも自分の子供の病氣となればさうもさうばかしも云へぬ時がある。

○それは一体何故であらうか、之は主として自分の子供は自分でなければ世話する人がないからである。又さうすることが必ずしも利己主義ばかりでなく、社會生活の進歩でもあり、又正しいことでもある。それはともかく今度自分の子供が重患にかゝつて、さうかと心配せられたとき、そこに私は一種云ふことのできない子供への愛着を感じた。

○其の愛着は折角此の世に生れて來て、己に九つにもな

るのに、此のまゝ死ぬかと思ふとき、そこにはあらゆる方法を以て其の子の全快を期すべく覺悟した。あらゆる時間と費用をも顧みず、かくて時間と費用とを極度に反省した私としては寧ろ之が當然かと思はれた。とにかく最善の手を盡す。それが此の際に於ける私の第一の覺悟であつた。

○愈入院ときまれば萬事がそれを中心として其のはこびとなる。人數も手不足であり、又私には昨年以來の著述の仕事もあるが、今としてはそんなことも云つて居る場合でない、先づ子供の病氣を療することが第一である。そして勉強讀書は其の中からしやうと覺悟した。

二

○入院後の経過はさうかかと云へば先づ順調な方であつた。ところが其の後が二十日ばかりも立つたとき、体温も平熱になつたとき、主治醫の博士は「之からが大切である、成可く平靜にして、何ごともあまり談かけぬやう」との注意であつた。「之は愈々病氣が平癒に近づいたので一同が安心する。而もその安心するところに、病

人も看護人にも油断をする、従つて其の時反つて失敗が出来やすい爲め」かと思つた。

○然に事實はさうではなかつた。さうしたわけか、得てかうした病勢の變り目に幾多の余病が併發する。それは必ずしも病氣に對する看護や病人の手落ばかりではないと云ふ。私は之を後から知つた。乍然其の事實は之より先きに起つた。それは子供への齒の病いであつた。

○丁度平熱の二三日もつゞく頃、突然にも病人の齒が痛み出した。其の初めの程はあまりに痛いとも云はない爲めか、主治醫の方でも水でも冷すか、冷シツブでもせよと云ふ。然にそれは夜になつても痛みが止まない、それから二三日と云ふものは非常に痛んで堪えぬと云ふ、而も一方の齒ぐきがはれ出した。おまけに体温も九度八分となり、幾十日とおかゆさへ食べぬ子供には之ではどうかと思はれた。

○看護婦に聞けば此の病院には齒科醫がない、だからあなたの方で齒科醫を呼んでくれと頼めばよいと聞かされた。何故にこちらから頼まねばならぬのか、主治醫の方でその必要を認めたら、そのことをこちらに云つてくれたらよいではないか、それなのに何故にこちらから、それを頼まねばならぬのか。乍然事實はここまで事實としてそんな理窟も云へぬので、腹も立つたが、それでは

と云ふので齒科醫を頼むことにした。

○然し幸にもそれから直に齒科醫の治療で痛も治まり、水で冷してゐた、めに幸にも齒根も膿化してゐなかつた。此の衰弱し切つた病人にかうした余病の並發は全く子供としては致命傷とも云ふべきだ、私は此の時ばかりは全く困つた。而も困つたばかりではない、愈々子供の壽命が之で終るのではないかと思つた。ぬれ紙のやうに寢床にべつたり寝ついた子供の姿がいかに氣の毒でならなかつた。哀愁の念とは即ち此の事を云ふのであらう。

三

○たつた一人の病人の爲めに、一家は丸つきりその爲めにかゝり切りである。乍然それでも考へやうでは長女の病氣と云ふことが他のものゝ病氣に比ぶればざれ丈けましであつたか知れない。私共両親の一人が寝こむとしたならばそれはまたより以上の困窮である。それかと云つて六つの良子か二つの光道であるならば、これもまたあまりに年が行かないのでざれ位看護がしにくかつたか知れない。

○それに私が昨秋以來、各地の傳道を中止して自宅に居たと云ふことが病人の爲めにはもとより、一家の爲めにもざれ位好都合であつたか判らない。最初の目的としてそれがそのまゝ如來の大悲であり、如來の大悲がかうして子を思ふ親の心にも顯はれて來るのであらう。

○私は今更のやうに、子を思ふ親の愛情を知つたかに思ふ。それは普通にはあまりに顯はれぬものである。否少くとも、今度と云ふ今度は初めて親の心を知つたかに見える。私の心の上に自然と顯はれる親としての心、それが又限りなくつかしき責いものである。そしてまた初めて世間多くの人々の上にも、子を思ふ親の心の尊さが一層はつきりと判つた心地がする。

四

○然しかうした中にも讀書はした。主として日本古代史の研究である。殊に有史以前の日本民族の研究がその主なるものであつた。此の研究は私の永年の願いであつたので、近頃に於ける私の喜びの一つである。私達の學校時代では、日本民族の古代史的研究が殆ど全く判らなかつた。たまたま判つたとしても之を知るには可なりの困難が伴なつた。従つて私共の學んだ日本史は殊に古代史に於て、神話と歴史とが一緒であつた。日本民族の有史以前とか、元始時代の日本民族と云ふものは全く神代としての神話に過ぎない有様であつた。

○此の点に於て私は何さかして日本民族の古代の史が知れたかつた。そして神話と歴史との區別を判然としたか

の勉強は確に一つの打撃であつたにはちがいないが、各地への約束なきが爲めに道友への迷惑はかけずにすんだ。

○而も靜に人生の一生を反省してかうした一家の災難を思ふとき、之等の災難がそのまゝ一切人類の一家の災難としての體驗かと思ひ及ぶとき、私には此の限りない一家の困難はやがて又一層尊い寵恩と思はれた。夜もろくろく眠られず、四十日許りは全く病室に帶もとかなかつた。疲れるまゝに晝は病室で居眠りし、目がさむればまた讀書した。

○かうした中に、子供の病氣が少しでもよいとなれば全く喜びに充たされた。その喜びは實に譬へ難なき喜びである。之は主として子を思ふ親の心である。殊に此の味はその子の重患に於て初めてである。數日のつかれも、多くの入費もかうした子供の爲めなれば、少しの不平も歎きもない。如來の大悲もかうした所に初めて味はれて行くのを見た。それは決して子を思ふ親の煩惱とのみは見るべきでない。

○それはそのまゝが如來の大悲である。多くの道友を思い、そこに眞生の意義を説く、私の心には此の子を思ふ心と同じものがある。否、此の子を思ふ親の心をそのまゝに多くの道友の上にも見るのを知つた。そしてまた、

つた。それには眞の考古學的、人類學的、人種學的、研究と日本古代の研究を必要とした。而も私には今度それが許された。私には限りない喜びである。

○其の次の研究は日本民族の文化史的研究であつた。而もこれは従來のやうな單なる日本の政治史ではなくして所謂日本文化の綜合的研究である。就中之に伴ふ日本佛教思想の盛衰興亡の關係である。之は未だかつて我が日本史では誰も研究したものがない。乍然それだけに、私は目下此の要点に對して可なりの研究の必要を感じてゐる。

○言換れば日本佛教に於ける各宗各派の興亡盛衰と社會組織の變革について、之を經濟學史の上に反影して見るのである。

○此のことは延て印度と支那にも及びたいのであるがそれは今日の私としては時間がない。昨秋以來その爲めに、今一度支那印度の歴史を通覽して、之を當時の佛教思想と併せ見やうとつとめたが、之が大成は後日にゆづることとした。

○乍然大体に於て、社會經濟の變遷と社會組織の變遷とは實に密切な關係にある。従つて、社會民族の發達に於て、社會制度の變遷と社會經濟の關係が其の社會思想信仰の上にも重大なる關係のあることは、今日のところ私

共の絶對に認めざるを得ないものがある。而も多くの場合新しき思想信仰の勃興は必ず其の社會の經濟組織の大變革の前後にあることを知るべきである。

○即ち此のことなくしてはたと如何なる思想信仰が外國からその國にはいつて來ても國民は決して之を受入れない。従て此のことを私は従來の歴史の上に日本佛教の興亡盛衰を反影して見たいと思つた。而もそれが今度の美智子の病窓で可にできた。

○而も私はそれを單なる歴史の上に証明するのが目的でない。私の眞の目的はかゝる研究の結果として今後に來るべき日本民族の、否、一切人類の今後に於ける人生の眞意義を見たいが爲めである。而も、それは幸いにして今回の美智子の病氣によつて。曲りなりに判然したわけである。
(四、三、五)(東京、學寮にて)

禪 勝 房 (下ノ二)

中 村 神 羽

遠州大日山と云ふは海拔二千八百尺で大した山でも無いが、金剛密院繁昌坊と云ふ古い寺があるので人に知ら

れて居る。

其大日山の谷奥から出る泉、山間谷間をうねりうねつて三里流れては三倉川と稱へ、更に此處袞田の三首で名を森川と改めつゝ南へ眞直に太田川となつて海へ下る。

此森川をはさんだ天の宮袞田の郷、山間ではあるが本宮山一宮小國天神の神領で人家は割に多い。

我が禪勝房の住むなる天台の古刹蓮華寺と云ふのは正に此里にあるのである。

先頃計らずも長樂寺の隆寛和尚に會つて、禪勝房の心境は一變した。而して間もなく此處に住む様になつたのである。化導も積極的にやり人々も多く其徳をしたふて集る様になつた。然し生來靜かな人であるから、十字街頭に立つて獅子吼すると云ふ氣分に迄はなれなかつた。

御話も至極平易で重に念佛實感上の事が多かつた。元來研學は中途でやめて信仰へ轉入したのだから學問の素養を充分に持たなかつた爲めでもあらう。論理的に順序立てゝ堂々と押し進んで行く様なやり方は嫌ひであつた。感じたままを云ふか又は昔然上人様から承つた事を思ひ出すまゝに話すと云ふやり方であつた。

元來法然聖人は余り輪廓が大き過ぎたので外部から迫害を受けた割に門下の凝力がうすかつた。随つて門流が

十五乃至十七流と云ふ様にこまかく分れた。然し大別して二つにする事が出来る。所謂、起行派と安心派とである。聖光隆寛長西等は起行派中の雄たるものであり、幸西澄空親鸞等は安心派中の優れたるものであつた。諸師の所説各々據り所あり各々勝れて居る處があつた。誠にかく蘭菊を争つた事は法然宗團結の爲には兎に角、全念佛門興隆の上に重大な意義をなし役目を果したものだとも云へやう。

本願義一念義弘願義諸行義三昧義道心義說法義選擇義他力義一向義多念義九品義勸進義なぞ華と榮え實と結んで實に目覺ましい次第でもあつた。

だが我が禪勝房は何義でもなかつた。何派でもなかつた。一念義でもなく多念義でもなかつた。唯だ一念の往生を信じて行を多念に相續したのに過ぎなかつた。

禪勝房の様な信仰家に取つては論理的な義解は大した問題でなかつた。だから安心派のやつた様な天台華嚴の哲學を借りて來て念佛教義に深みを付けやうとする傾向を喜ばなかつたのも當然であつた。

また一方起行派の様な、ともすれば自分の念佛に基礎を置かうとする傾向も嫌ひであつた。自分の念佛に頼みを置く傾向は従來聖道門の思想に馴らされて來たもの、陥り易い弊であつたからである。

或る時或念佛信者に尋ねた事がある。

「常々御本願の趣きを信じ常々御念佛にいそしまれる事は誠に貴い事だと存じます。」

先日一寸或る御方から承りました事ですが、あなたの往生淨土に就ての思召しを

左手を右手で打つのに打ちがぶしがないと同じ様に自分の往生は疑ひない事だ。

とお話し下さつたとの事ですが、甚だ恐入りましたが夫れを今一度委しく私に聞かせて下さいませんか、是非御願ひいたします。」

「イヤ、誠にお耻かしい事です。實はさう云ふ言ひ顯はし方がまだ何となく落付かない氣持ちがしてならないので、一度あなたに御批判して頂きたいと思つて居つた所でした。つまりかう云ふ事です。」

私の確信は私の御念佛申すこと夫れ自身を確証とする事なので御座います。私が御念佛申すと云ふ事は誰にも認めて頂いてる事實で、私の心が私の心を促がし私の舌を働かせて申すのですから此れ程確かな事はないと存じます。私の此度生死の海を脱して御淨土に生れさせて頂く事は私がお念佛申して居る限り決してはづれる事のない確實な事だと確信して居るので御座います。如何で御座いませうか。」

「オ、夫れは一應御尤もの様では御座いますが、其處に不確實な條件を置いて居るのでこんなものでせうかと存じます。即ち不確實な條件で確信を築いて居るので失禮な言分で申譯もありませんが何となく砂上の塔の様な氣がするので御座います。」

あなたの意志あなたの御心を原動力とする御念佛申す事夫れ自身に基礎を置かうとする事は危険だと存じます。御念佛申す事夫れ自身は貴い事でも、有り難い事でもありません。御念佛申させて頂ける大きな力が働かなかつたら御念佛は申されないではないかと思はれます。左手を右手で打つ時、もし他からさまたげがありましたら打てないかも知れません。私達の御念佛も魔障の爲めに申されない場合もあり得るに存じます。私はかう思ひます。私達の念佛往生は私達の申す御念佛に依つてではありません。私達の申す御念佛を通ふして如來様の御心が私達の赤子の様なところに大きな力となつて感じさせて下さる。此處に救ひと云ふ驚歎す可き經驗を味ふのであります。之は日に新らたに日々に新らたに味ひ得る如來様の御慈悲であり而して念佛信者にのみ許されたる喜びであります。之は救はれて居るのだと云ふ概念でなく、現に救はれつゝある味ひ其物であります。ですから私達念佛信者の往生淨土

村人は稻刈なごに忙はしく

夜集りて三昧に入る

高明伯田緒も深き此宅地

念佛の聲も遠く響けり

念佛のあみにかゝりて魚釣竿を

折り給ひし君勇猛しき哉

目覺めなばこれまであしと思ふ人

却りて己か師も仰がむ

今日一日妻子をたのみ家を捨て

念佛三昧わたかまりなし

結構の風呂に入りても御念佛

窓に真如の月のうれしさ

妄念を御客となして部屋に入れ

書院の主は只御念佛

板椽のうぐひす張りはうれしけれ

梅の代はりにもみちなれとも

遠近や識らぬ識る人交り

禮儀正しき佛前の景

佐屋川の白砂の上に坐禪せば

ガンジス河を思出しつゝ

願くは大往生を此處にせむ

釋迦牟尼尊を慕ひまゐらせ

念佛三昧會感想詠歌

於佐屋村墨宮平八翁主催

早川 禮山

念珠もち木魚叩く身となりて

日々に殖えゆく稱名の數

三昧會日の暮れたるも忘れつゝ

彼土にてもかくやありなん

我と云ふものありと思ふころこそ

何かにつけて妨ぐるなり

犠牲は苦しきものにあらず。むしろ楽しく勇まじきものと
思ふ。義人よ出よ、義人よ出よ、身心を捧げて世を
救はんす義人出よ！

○ 私共は毎朝数碗の飯が犠牲になつてくれて、半日の間
此の十數貫の體を活動せしめて貰つて居る。
己が惣ての慾望を忘れて身を犠牲にして、一家の爲に
盡す戸主の元に、一家族の幸福は生れる。孝子忠僕の話
を聞く時心に響くものがあるを覺ゆ。

○ 一身は元より一家親子妻子迄も君國郷土の爲に捧げた
る事を見聞する時心はをざる。

○ 聖日蓮が「我れ日本國家の柱とならん」と世の有様を
見るに見兼てふるい立ち給ひしを、しさを思ふ。

○ 釋尊出山以后、東奔西走家庭の人とならず、専心慈光
の宣傳に身命を捧げ給ひしを思い、生死も何ぞものかは
との感深し。

○ 國土社會の全一なる幸福を念願する者は身命を捧げ道
の爲に一家妻子を遂にかへり見るのいとまなし。

○ 一人の義人死して一郷土の救はるゝを見、一クリスト
の死して幾百萬の人心を生かしつゝ有るを知る。

○ 人生は數十年乃至百年に満たざらむ。物質的豊富必ず
しも幸福と正比例せじ。貧者も富者も先づ道の如く生活
すべきなり。人生すべからく如來に心身を捧げてつかへ
奉るべし。そこにこそ絶對の幸福は求めずして來らんの
み。いかで日々起臥して、米喰動物に我が一生を過さん
や。

○ 然り而して身と心との捧げ方については、思ふに死す
る事のみが正しきに有らず要はその人の時と所とに依る
べし。

○ 現代の世相は余り人間的動物化してしまつた感があ
る。お互ひに自己中心だ、全体の幸福を思はぬ全一の幸
福を知らぬ。心の寫真がもし採れるなら實にどんな有様
だらう。

○ 私は一ヶ月中二十日間、自己の衣食の爲に勞役し、あ
と十日間を如來の御心に捧げ切つて見たいと思ふ。先頃
以來之をやつて見たが、中々理想の通りに行かない。而
しながらやつて見れば氣持はよい。

○ 昨年下半年から、不景氣は段々烈しく、平氣にやつて

○ 行けるかと思はんでも無いが、とにかくやらうと思へば
やれるもの、私の如く智恵も學文も無いものでも決心だ
にあらば大丈夫やつてのけられる。

○ 如來様の御心にかなう仕事なら、必ずしも慈光宣傳は
かりが傳道でないといふことも知つた。

○ 要は身と心を捧げて生活するならば、其まゝが佛恩報
謝である。商賣するも、工業するも、ねるも起きるも、
其まゝが眞生である。とにかく念佛することに依りて、
惣ての苦勞の根がたえて、此の樂い生活が知れて來たと

○ はさうですか。僕も引こんでばかり居る
よりも、時々やつぱり出た方が身心の爲
めにもよいかと思います。せめて、朝だ
けなり、晝中なり、それこそ朝晩だけなり
を勉強の時間に與えて貰つて、時々は道
友の集りにも加はりたいと思つてゐます

○ 次は昨冬來の長女の病氣も快方に向い
まして、二月下旬に退院しました。自宅
で療養中でありますがそのうちに全快の
こそ、存じますから、乍他事御安神願上
ます。幾多の方々から御見舞を受け乍ら
そのなりで失禮いたして居る所も多いの
で紙上を以つて深く御禮申上ます。

○ は實にありがたい。

○ 念佛の味知り初めしあしたより惣てのなやみちりうせ
にけり。

○ あら不思議つらいかなしいこゝがみなそれがそのまゝ
よろこびの種。

○ 迷ふとも知らで迷ひに迷ひつゝ迷ひに迷ふ人々あはれ
自分の過去を思ひて

○ 道知らで日毎日毎に苦しみぬ浮世の辻に獨り迷ひて

吾 朋 便 り

○ 東京 土屋 觀道

○ 愈々春らしい氣候となりました。春の
彼岸ももうすぐです。道友の皆様には御
變りもありませんか。あまりに皆様にも
御遇する機會が少いので御便りだけなり
こそ思えてなりません。それにつけても
時々はお互にお目にかゝつて語り合ふ方
がやつぱりよいやうに思いますね、皆様

○ 尚行基寺の三昧會も別紙の通り愈々來
月となりました。久々の集りのこと、て
各地の道友も多いこと、存じますが、今
回は岐阜縣下の寺院方も御一緒の事
です。私も及ばず乍ら全力を注いで精進
いたすつもりです。皆さんの中からも奮
御參加のほどを願上ます。

○ 私の勉強も子供の病氣で非常な妨げら
れましたが、之からまた一しきり勉強す
るつもりでありますから、幸に御安神下
さい。目下讀みたい本のみが多いのでそ
の選擇に困る位です。乍然それだけなま
けるつもりでないのですから御喜びを願

います。

□尙年未筆、道友の御便りやら、原稿を頂き度存じます。殊に道友の隨筆は其の地その人の實観として最も讀者間に歡迎せられて居りますから、多少にかゝらわらず御投書のほどを御願ひ致します。

○名古屋 淺野孝眼様より

さて私共には思もかけぬ出来事が起りました。それはかれて御引き立に豫つてゐました愚弟眞下孝照事俄然急病にて逝去いたしました(二十二才を二期として)卒業を前にしての若き身の何んとも言へないがなじみの極みであります。お恥しながらまだ今日までに経験せざる無常な体験して今更の様にござろかれました。乍然命終に付きましては、只今も學校の先生からの御手紙によりまして「臨終まで正念稱名して死も既に自覺してなられ、かくも平静に逝かれし事は誠に往生傳にものぼすべき人かと思はれ申候を、せめてものなぐさめに思ひ申候」この事、これは一偏に御上人様其他皆様の御指導によるものと本人の幸福併て私共の喜びであります。二月十五日涅槃會の日であ

りましてチヨウド初七日が當方例會でありまして中野様行基寺様始め皆様のお心からなる御回向が願はれまして、而もそれがためでせうか、非常にひきしまつた例會が營まれました。やはり私への御教示であつたかと存じます。

○大垣 馬淵章様より

日夜御上人様には著述に御多忙の御事ご推察仕り候當年は殊の外寒き甚しく皆々様相變ず御健やかに透らせられ候地方の道友は相變らず精進努力致し居り候間御安心被下度、來月十日十一日は二日の休日を利用して別時三味會を開催仕り度桑原様が中心となりて念佛精進致し居り候間御安心被下度候

○行基寺様より

六日附御はがき洗手奉拜見候四月十六日よりの別時會御快諾被下難有樂し申上候春蠶期より一寸前ゆへ差支無之事と存上候道友一同樂しみ居る事と定めて盛會ならんご期待申候例に準じ四月十五日夕方迄に御着願上候其準備に取か、り申候三月號廣告は來る二十一日崇徳寺へ参り百々様に面會御話し申上候ま、御了

承願上候次に美智子様御病氣にて御入院の旨驚入候不存事とて御伺ひも不致失禮仕り候

○大阪 曾我尾昌治様より

大阪支部では念佛修養だけ以前と變りなく實行いたして居ります。過る二十三日には藤村源三氏宅で修養會を開きました。小人數でしたが、私の友人で芦屋に住んで居る者が二人出席して呉れまじたりしまして、藤村様でも大悦びでした來月の十日十一日には黒宮様へ大阪支部員擧つて御伺ひする相談がましまりまして悦で居ります。

○佐屋 黒宮平八様より

降て私方何れも無事暮させ頂き居候間乍他事御省念被遊度候以御陸先月四日來九日間宅にて別事修養致候小人數に候得共有効に勤修致し三四名の熱心信者も出來申候十七日より擧母に三日間岐阜に一日美の横會根安田氏方にて三日間大垣にて四日間同友と念佛修行致し月末歸宅致候以御陸一月中は旅と終始念佛精進に生活致させ貰ひ候本月九日より三日間大阪曾我尾氏初め同信來駕を乞ひ修養致度

心組に御座候終て十五六日頃より一週間美濃地方へ出掛る心算に致し候老來益健全唱名相續爲致頂き候事偏に御上人様の御徳と難有御禮申上候

●印刷部より 百々治之助

麗らかな春の陽氣になりました。誌友皆様には益々慈光裡中に御活躍の御事と御慶び申上げます。本誌の發行が時々遅延致しまして皆様の御期待に背きますことは誠に申譯ありません。どうか悪しからず御赦しを願ひます。

誌友諸氏よりの通信等は可成廣く多く輯録したいのですが今のところ紙數の關係上残念ながら前後省略し而かも其の一部分しか掲載が出来ません。之れ亦併せて御詫が申上げます。

本誌の發展に付ては豫々土屋主幹の非常に苦心されてゐるところでありまして私もせめて何とかして本誌の經濟が獨立し得る位まで發展し得たならばと思ひますが今のところそこまで行き兼ね有様です。これに付て創刊以來の收支がごんな状況にあるかは各其都度個別的に記帳されたまゝ、未だ組織的の計算が出来てゐ

ませんので此の一月以來谷口さんが其の整理に努力されてゐますから何れ違からず精算して一般に御報告のできる事と思ひますが、只今概算の上では大正十一年より昭和二年迄の總支出が五千四百圓に對して總収入が三千五百圓程度であります。之れには道友の誌代並に寄贈等の全部が加算されてありまして結局右六ヶ年間一千四百圓の缺損となりそれだけ主幹が物的犠牲を拂つてゐる譯であります。若し讀者中で誌代未納の方がそれをさへ支拂つて頂くならば此の缺損は補填される事と存じます。併乍果してそれが

だけだけ達せられるか判りません。中には五十圓百圓さ度々寄贈された人もあるかと思へば八ヶ年の今日此頃になつて、何等一言半句のあいさつも無く只符箋して突返されるやうな方もあります。冷酷さ云はふか慘酷と申さうか本誌の發行が營利本意で創められてゐないだけ主幹の胸中もさこそ涙ましくなるのであります。又中には「雜誌まで發行して金儲けするなんて慾が深過ぎる」など、批議する人もありしやに聞きました。誤解

も此所まで参りましては嗚呼たらざるを得ないのであります。

それに付てもよくも今日迄本誌がかうして繼續されて來たことと、入社日淺き私共には寧ろ奇蹟的に思はれるのであります。勿論如來の大なる加被力によることでしやうが、そこには限りなき道友の上なき愛護と永年編輯部員の無報酬的御盡力の然らしむ所でありませう。殊に越後、清水、大垣、岐阜、大阪、名古屋等の各支部特志の道友が本誌發送に關する分擔事業に於ける永年の倦まざる御盡力は正に之を知れる道友の限り無き感謝であります。

最後に本誌を中心として私の誌友皆様にお願ひいたし度きは、誌友御一人に付御一名の讀者を御紹介の勞を採つて頂きたい事でありませう。本誌の愛讀者が現在數を倍加しますれば、よほど經濟状態も緩和される譯になるからであります。尙本誌發展に付ての御考案もあらば皆様の御進言を願ひたいと存じます。

又誌代未納の御方は御面倒ながら御拂込み下さるやうお願ひ申上げます。

行基寺別時三昧會案内

時 所

四月十六日午前五時開白
同二十二日午後九時閉會

導 師

土屋 觀道師

(養老電鐵線美濃山崎驛下車約十五丁)

土屋上人は四月十五日夕方御着になります。久方振りに御上人の御指導を仰ぎお互に一層しつくりと修養したいと思ひます。前日までに御登山下さい。

行 基 寺

寄贈並誌代拂込御芳名

- 四拾圓 東京神谷善之進様(寄贈)
- 壹圓 岐阜若園清作様、廣島淺野戒全様、長野吉田隆太様、東京水野重造様、岐阜後藤義人様、新潟矢代成一様、大阪大山政子様、全土田徳太郎様、全佐野眞太郎様、全伊藤花子様、全伊藤友三郎様、山口河本つね様
- 貳圓 大阪弓場愛子様、浦賀三次六兵衛様、神奈川吉水竹道様
- 貳圓五拾錢 伊勢高宮加藤彌三松様、全岡田橋太郎様
- 參圓 尼ヶ崎西成昇孝様
- 四圓 兵庫鈴木憲榮様
- 五圓 横濱熊澤國式様、伊勢高宮安田善善様、加藤傳十郎様、川村二郎様、桑名五井さよ様
- 貳拾錢 三重大石上富助太郎様
- 拾五圓 神戸鶴田昌造様
- 貳圓 大坂上田顯光様
- 壹圓 大阪神谷學周様、名古屋渡部善兵衛様、一宮久保善亮様、大垣不破二郎様
- 壹圓參拾錢 名古屋鬼頭譽様

七八、五の

(大正十四年八月十三日) 昭和四年三月十七日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第八卷 第三號
(第三種郵便物認可) 昭和四年三月二十日發行

(大正十四年八月十三日) 昭和四年四月十九日印刷納本
(第三種郵便物認可) 昭和四年四月廿二日發行

價定誌本
一部 金十錢 郵税共
半年 金六十錢 全
一年 金一圓 全

注意の文註
 ◆講讀希望者は代金を添へて御申込下さい。
 ◆誌代は總て前金御拂込の事
 ◆送金は振替によるのが便利
 です

振替口座東京四七二八八番 眞生社
 昭和四年三月十七日印刷納本
 昭和四年三月二十日發行

編輯兼 土屋 觀道
 發行人

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷人 百々治之助

電話西(5)二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目

印刷所 堀山田活版印刷所

電話東(4)三六・三五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社